



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中間言語における普遍文法の働き : 1996年の調査報告
Author(s)	佐藤, 豊
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 1, 39-53
Issue Date	1997-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45549
Type	departmental bulletin paper
File Information	BISC001_004.pdf



中間言語における普遍文法の働き

— 1996年の調査報告 —

佐 藤 豊

要 旨

本稿の目的は、(1)現在第2言語習得で前提とされている実験方法の問題点を指摘し、新しいアプローチを提案する、(2)成人による第2言語獲得に対する普遍文法の関与を示唆するデータを提示するという2点である。

ある普遍文法原理が第2言語獲得に関与できるかどうかを検証する際、母語からの転移を避けるために、その普遍文法原理が機能していない母語をもつ被験者を選ぶことが前提になっている。しかし、普遍文法が関与する言語操作は、ほとんどすべての言語が持っており、母語において機能するが目標言語においては機能しないという普遍原理を探すのはなかなか困難である。本稿では、同じ普遍文法原理が母語と目標言語で機能しても、その原理に関わる言語操作が全く異質な場合は、母語からの転移の可能性を排除することが可能であることを論じる。ここでは、適正束縛条件という普遍原理により移動をとりあげ、WH移動等に関して適正束縛条件が機能している英語・フランス語・イタリア語の話者にも、日本語の「かきませ移動」が適正束縛条件を守ることを普遍文法なしには推測することはできないと論じる。

上の前提にたち、英語・フランス語・イタリア語を母語としてもつ合計14名の日本語中上級の学習者に対し、文法性判断テストを行った結果を示す。その結果、統制群同様に93%の確率でこれらの学習者はかきませ移動による適正束縛条件違反を正しく判断することができた。詳しく彼等の回答を考察すると、被験者の判断は語順・入力頻度・複雑さのみによって、説明はできないという結果が出た。

【キーワード】 second language acquisition (第2言語獲得), Japanese (日本語), Universal Grammar (普遍文法), the Proper Binding Condition (適正束縛条件), scrambling (かきませ移動)

1. はじめに

Chomsky (1981) は、母語 (第 1 言語、L 1) 習得における言語入力 (input) は、最終的に獲得される文法を決定するには余りに貧弱であり、L 1 獲得は言語入力のみに基づく帰納的な作業ではなく、生得的な普遍文法 (Universal Grammar, UG) の介在により達成されるものであると提唱した。さらに、Chomsky は具体的な文法原理とその可能な設定値 (パラメータ値) を UG として示した。母語以外の移民・留学先の言語 (第 2 言語、L 2) 獲得においても同様に「言語入力 < 獲得文法」という不等式が成り立つと考えられる (White 1989) ことから、Chomsky の UG 仮説を受け 1980 年代から 90 年代の中間言語研究において、(a) L 1 獲得・L 2 獲得両者への UG 関与を肯定する立場と、(b) L 1 獲得には UG 関与を認めるものの、臨界期仮説 (Lenneberg 1967; Long 1990) に基づき、L 2 獲得は L 1 獲得とは根本的に異なり UG が関与しないとする立場 (Fundamental Difference Hypothesis, Bley-Vroman 1990) の間に論争が展開された。移動に対する制約 (下接原理)、再帰代名詞の照応範囲、代名詞照応の方向性、ドイツ語の語順、プロ・ドロップ現象等について UG 関与の有無が検証され、Flynn & O'Neil (1988)、White (1989)、Eubank (1991, 1995) 等にまとめられている。小論は、従来の L 2 獲得研究の方法論を再考し、成人 L 2 獲得への UG 関与を支持するデータを示すものである。

L 2 獲得における UG の働きを肯定し、L 2 獲得には UG が関与しないという立場 ((b)) に反論する場合、L 1 獲得研究とは異なり L 1 からの影響を考慮する必要がある。即ち、ある UG 原理が中間言語において機能していると主張するためには、そのような規則性が L 1 から転移 (transfer) したのではないことを証明する必要がある、そのため、その UG 原理が L 1 において機能していない話者を探すことが前提となっている (White 1989, p. 61f)。このように、ある UG 原理が関わる言語操作がない場合、その UG はその言語に「具現化 (instantiation)」されていないと言われる。そして、たとえば WH 移動 (小論では LF 以前の WH 句の WH 移動のみを指す) に対する制約を習得できるかどうかを検討する場合には、L 1 に WH 移動のような言語操作がない言語の話者を選ぶという手段がとられたのである (Schachter 1989; Bley-Vroman et al. 1988)。しかし、UG 原理は数少なく、殆どが全ての言語において機能していることから、ある言語に具現化されていないながら他の言語には具現化されていない原理と適当な被

験者を探し調査を行うのは、容易なことではない。このため、このような研究方法は厳密には守られておらず、英語の WH 移動に対する移動制約（下接原理）を WH 移動を持たない L 1 話者が学習するかどうかを検証する際も、WH 移動以外の移動の有無は殆ど考慮に入れられていない（上掲論文）。UG 関与を検証するのに適した L 1 と L 2 を見つけることの困難さは、80年代後半から現在までの生成文法の理論的な枠組みの変化（Chomsky 1995）により、さらに増している。White (1995) は、従来様々な原理で説明されていたものが高度に抽象的な少数の原理に集約されていく現在、L 1 と L 2 で具現化の有無が異なっている UG 原理を探すのは困難、あるいは不可能になりつつあると論じている。しかし、果たしてそうであろうか。

UG 原理の集約により、L 1 からの転移の可能性を排除することが困難、あるいは不可能と考えるのは、従来の研究方法を踏襲しているからである。たとえ UG 原理がほんの少数に集約され、L 1 と L 2 に常に同じ原理が働いているとしても、L 2 の UG 原理が L 1 からの転移なしに獲得されるかどうかを検証することは可能だと思われる。換言すると、L 1 と L 2 の異なった言語現象が同じ UG 原理に制約されていても、そのことだけにより L 1 から正の転移を想定することはできないということが言えるのである。L 1・L 2 双方に同じ UG 原理が関係する言語操作があったとしても、L 2 の言語操作が L 1 の言語操作と同じ性質を持つことを学習者が認められなければ、L 1 に具現化された UG 原理が利用されることはないはずである。具体的に言えば、WH 構文 *What can you see?* を *you can see what* から派生させる英語の WH 移動と同じような WH 移動を持つオランダ語の L 1 話者は、英語の WH 移動に接しそれが母語の WH 移動と同じ原理により制約されていると想定することは可能であろう（Schachter 1990）。しかし、「太郎がりんごを食べた」から「りんごを太郎が食べた」を派生する「かきませ移動」を持つ日本語や韓国語の L 1 話者は、かきませ移動と英語の WH 移動が同じような移動制約（下接条件）に則っている（Haig 1976；Saito 1985）にも拘わらず、2つの言語操作が様々な点で異なった現象を示すことから、共通原理となる UG がなければ、L 1 のかきませ移動の制約を英語の WH 移動の制約として利用することはできないと思われるのである。

ここではまず、UG 原理が L 1 と L 2 にどのように具現化されているか

を見極めることにより、両方に同じ UG 原理が働いていても、L 1 から L 2 への転移の可能性を否定することができることを論じる。検証される UG 原理は、(1)のように定義される「適正束縛条件」(Proper Binding Condition, PBC) という制約である (cf. Saito 1989)。

(1) PBC : ある要素が移動した場合、その移動先を含む最小の構成要素 (句や節等) は、その移動元 (痕跡) を含まなければならない。
この原理は、例えば(2)の WH 構文の非文性を説明する。

(2) * [Which pictures of t_i] $_j$ do you wonder [CP who_i [IP John likes t_j]] ? (Takano 1994)

(3) you wonder [CP — [IP John likes [which pictures of who]]]

(4) you wonder [CP who_i [IP John likes [which pictures of t_i]]]

(2)の派生のためには、まず(3)の *who* が埋め込み文 CP に WH 移動し(4)を派生する。*who* が元あった位置には、そこから移動したことを示す痕跡 t を置き、双方に指標 i を付す。次に *who* の痕跡 t_i を持つ [which pictures of t_i] が主文の文頭に WH 移動して(2)が派生される。この結果、(2)の *who* を含む最小の構成要素 (埋め込み文 CP) 内には、*who* の移動前の位置 (= t_i) が含まれず、PBC に違反し非文となる。

日本語のかきまぜ移動も PBC に違反することはできない。(5)の目的節内にある「映画」は、(6)のように文頭にかきまぜ移動することが可能だ (Saito 1985)。(6)の痕跡 t_i は、「映画」を含む最小の構成要素 (角括弧 1) に含まれているために、PBC に違反せず非文にはならない。(以下の例文には、議論とは関係ない PRO、pro、痕跡等は示さない。また、説明の便宜上、角括弧に番号を付す。)

(5) 太郎が [映画を 見に] 行った。

(6) [¹映画 $_i$ を、太郎が [² t_i 見に]² 行った]¹。

しかし、(6)の目的節 (角括弧 2) をさらに文頭にかきまぜ移動すると、(7)のような非文が派生される。

(7) * [² t_i 見に]² $_j$ 、¹映画 $_i$ を、太郎が t_j 行った]¹。

(7)の痕跡 t_i は、移動した要素「映画を」を含む最小の構成要素 (角括弧 1) に含まれておらず、PBC に違反している。

従来の L 2 獲得研究の方法によれば、たとえ英語の L 1 話者が日本語の PBC 違反を正しく判断できても、PBC については L 1 からの正の転移が可能であると考え、そのような事例を L 2 獲得への UG 関与の根拠とする

ことはなかった。しかし、実際には、WH 移動を持つ L1 の話者でも、WH 移動に関する PBC をそのまま L2 のかきまぜ移動に転移することは不可能なのである。なぜならば、下に示すように、WH 移動以外の移動（主語繰り上げ・受動化）によって出来た痕跡は、PBC に違反してもよいからである。

(8) [How likely t_i to win] $_j$ is [John $_i$ t_j] ? (Takano 1994)

(9) They say he was followed, and [followed t_i] $_j$ [he $_i$ was t_j] .

(Huang 1993)

(8)の主語繰り上げにより出来た *John* の痕跡 t_i は、*John* を含む最小の構成要素の外にあり、(9)の受動化で出来た *he* の痕跡 t_i もやはり、*he* を含む最小の構成要素の外にあるので、(8)(9)ともに PBC に違反しているが、どちらも非文とはならない。

同じことが、日本語のくりあげ移動の痕跡についても言える。(10)の痕跡 t_i は「花子」が「天才だ」の節から主節にくりあげ移動されることによりできたと考えられる (Sato 1995)。このため、(11)のように「天才だ」の節が前にかきまぜ移動され、くりあげ移動の痕跡 t_i が PBC に違反する構造になっても、全くの非文にはならない。

(10) 太郎は、花子 $_i$ を [t_i 天才だと] 思っている。

(11) ?太郎は、 [t_i 天才だと] 花子 $_i$ を 思っている。

つまり、くりあげ ((8)(11)) や受動化 ((9)) のような移動（「A 移動」と呼ばれる）による痕跡は、PBC により制約されないのである。これに対し、WH 移動のような移動（「A' 移動」と呼ばれる）の痕跡は、PBC により制約される。かきまぜ移動も PBC により制約され、この点においては A' 移動の一種であると言える。

ある移動が A' 移動であるか A 移動であるかによって PBC に制約されるかどうかが決まるならば、かきまぜ移動が PBC に制約されることが L2 学習者にもすぐわかりそうだが、実はそうではない。なぜなら、かきまぜ移動は、A' 移動の特性を持つとともに、A 移動の特性も持つからである (Saito 1989, 1992; Nemoto 1995; Miyagawa 1997)。

たとえば、(12)においてかきまぜ移動された「ジョンとボブ」は、相互代名詞「お互い」の先行詞になることができるのである。

(12) ?[ジョンとボブ] $_i$ を [お互い $_i$ の子供が] t_i 見た。

(Miyagawa 1997)

しかし、このような照応関係は(13)ように A 移動されたものか、本来 A 位置にあるものからのみ可能である考えられている (Chomsky 1981)。(13)の *those parents* は痕跡の位置 t_i から A 移動 (くりあげ移動) し、相互代名詞 *each other* の先行詞になることができる。

- (13) Those parents_i seem to [each other's children]_{t_i} to look nicer than their own.

これに対し、(14)の WH 構文や(15)の話題化 (topicalization) 構文では、そのような相互代名詞の照応関係は許されない。

- (14) * Which parents_i did [each other_i's children] see t_i ?

- (15) * Those parents_i, [each other_i's children] saw t_i .

Miyagawa (1997) は、かきまぜ移動がテンスを持つ節から出ない限り、A 移動と A' 移動の両方の性質を持つことを、いくつかの根拠をもとに証明した。このように、かきまぜ移動は PBC 等に関しては英語の A' 移動 (WH 移動・話題化) と同じ現象を示すものの、照応関係等については英語の A 移動 (くりあげ移動・受動化) と同じ現象を示すことから、英語の L1 学習者はかきまぜ移動が A・A' どちらの移動であるかを判断することはできないはずである。

近年(2)(7)のような構造を PBC で説明せずに、派生の経済性により解明する試みがある (Takano 1994; Kitahara 1994)。このアプローチは、なぜ A' 移動により派生された PBC 違反が非文になり、A 移動の場合はそうでないかを同じ原理 (派生の経済性) により説明しようとするものである。このため、L1 に A 移動・A' 移動を持つ学習者は、L2 のかきまぜ移動の PBC 違反についても判断できそうに見えるが、実際には不可能である。なぜならば、(16)~(18)に示すように、かきまぜ移動は WH 移動や話題化移動とは派生の経済性 (最小性効果等) に関して異なった現象を示すからである。

- (16) ??About whom_i do you wonder to whom_j Mary talked t_i t_j ?

- (17) ??About this guy_i, John thinks that to Bill_j, Mary talked t_i t_j .

- (18) この男について_i、ジョンは、ビルに_j メリーが t_i t_j 話したと思っている。

同じ節から2つの項 (下線) が WH 移動 (16) あるいは話題化 (17) されると許容度の低い文が派生されるが、(18)のように同じ節から2つの項がかきまぜ移動されてもその許容度は下がらない。(16)(17)は派生の経済性によ

り説明できる (Kitahara 1994) が、(18)は同じ原理では説明できない。このため、かきまぜ移動をL1に持たない学習者は、それがL1のWH移動や話題化と同様に派生の経済性により制約されているかどうかをL1のみから類推することはできず、またそのPBC効果も予測することができないと考えられる。

以上、L1にPBCから制約を受けるWH移動や話題化があっても、日本語のかきまぜ移動がPBCに従うかどうかは、言語入力とL1を基にただけでは判断できないことを示した。もし、そのような学習者が日本語のかきまぜ移動がPBCを守ることを正しく判断できたとすれば、その学習者のL2獲得には、L1獲得と同様にUGが関与していたと想定できる。以上のことから、(19)のような仮説を立てる。

- (19) 仮説: L1にかきまぜ移動を持たないL2話者でも、UGに導かれ、日本語のかきまぜ移動により派生されたPBC違反を偶然より高い確率で非文と判断することができる。

最後に、被験者がPBCの関与による判断ではなくその他の仮説に基づき判断を下すことも考えられるので、そのようなものを根拠に文法性判断をしていないかどうかを確認する方法を以下に考察する。

第1に、語順による文法性判断を排除しなければならない。たとえ、(7)のような文を非文と判断しても、それはPBCに違反する痕跡があるからではなく、むしろ痕跡を無視して、単に動詞「見る」と「映画を」が通常と異なる語順で現われているからそう判断するという可能性もある。この可能性を排除するため、(20)のような文をどのように判断するかを同時にテストする必要がある。(proは音価ゼロの代名詞である。)

- (20) 太郎が [pro_i 見に] 行った (よ)、その映画_jを。

(20)は、かきまぜ移動ではなく後置により派生されたもので (Kuno 1978)、「見る」の後に「映画を」が現われるが、(7)とは異なり痕跡はなくPBC違反にはならない。(20)のような文を適格文と判断し、(7)のような文を非文と判断すれば、その判断は語順によるものではないことがわかる。

第2に、入力頻度が低い構文を非文とするという仮説を排除したい。(7)のような構文は単に耳にしたことがないという理由で非文と見なすかもしれないからである。学習者のこのような仮説を排除するために、(21)(22)のような文をテストすることが考えられる。

- (21) *? その学生は、北大で日本語を勉強しに来た。

(22) *その学生は、日本語を勉強しに北大で来た。

(21)は、日本語固有の文法では非常に許容性の低い文だが、同じような文型は、(23)にあるように、英語等の言語では可能である。

(23) The student came to study at Hokkaido University.

これに対し、(22)は、(7)と同じように派生され、(24)に示したように痕跡 t_i が「北大で」を含む最小の構成要素に含まれていないために、普遍的な原理 PBC に違反し非文である。

(24) *[[t_i 日本語を勉強し]に]_i [北大で]_j [t_i 来た]]

(21)も(22)も言語入力にはないはずなので、(22)を非文、(21)を適格文と判断したら、その判断は入力頻度とは関係ないことになる。

第3に、文の複雑さから非文と判断されたかどうかを確認することが必要である。たとえば、(7)はかきまぜ移動が2回適用され痕跡が2つあることから、言語処理に負担がかかり非文と判断される可能性もある。この場合、(25)のような文も、テストすることが必要である。

(25) 「それは」_i 花子に_j 「 t_i 壊れている」と_k 太郎が_j t_k 言った。

(25)は、(26)に3回のかきまぜ移動が適用されて派生されたが、PBC に違反していないので適格文である。

(26) 太郎が花子に「それは壊れている」と言った。

(25)のような文を適格文と見なし、(7)のような文を非文と見なす被験者は文の複雑さを根拠に判断したのではないと言えよう。

以上、(i)語順・(ii)入力頻度・(iii)複雑さを根拠とする文法性判断をしていないかを調べ、これらの可能性を排除しても PBC 違反を正しく判断していると認められれば、L2 獲得への UG 関与はさらに強く支持されることになる。

2. 実験方法

2.1 被験者

被験者として、L1にかきまぜ移動を持たない14名(英語11名、フランス語2名、イタリア語1名)の北海道大学の留学生と、統制群として日本語L1話者10名が参加した。14名の日本語能力は中上級であり、ACTFL

(American Council on the Teaching of Foreign Languages)の能力基準で言えば、大体 Intermediate-mid から Advanced の能力を持つ。

2.2 テスト文

実験には、(27)~(31)の10のテスト文を使用した。

(27) a. 私は、北大で勉強するために、日本へ来ました。

b. *私は、勉強するために、北大で日本へ来ました。

(28) a. 私は、座布団を枕に寝てしまった。

b. *私は、枕に座布団を寝てしまった。

(29) a. *?その学生は、北大で日本語を勉強しに来た。(=21)

b. *その学生は、日本語を勉強しに北大で来た。(=22)

(30) a. 私は、昨日すすきので田中さんに会いましたよ。

b. 私は、昨日田中さんに会いましたよ、すすきので。

(31) a. その学生は、田中に誰が彼を愛していると言ったのか。

b. 誰が、田中に、彼を愛していると、その学生は言ったのか。

(27)~(29)のb文は、いずれもPBCに違反している。(29)のペアは、入力頻度と関係なくPBC違反を見つけられるかどうかを確認するためのものである。語順によって文法性判断をしていないかチェックするために、(30)のペアを入れた。(30b)は(29)と同じ後置文である。語順による文法性判断をしているのなら、(30b)を非文と判断すると思われる。(31)のペアは、文の複雑さで判断しているかどうかをチェックするものである。(31b)は、(25)と同様に3回のかきまぜ移動適用により派生された文であり、これを適格文と判断していれば判断基準が複雑さではないことが確認できる。

2.3 実験の手順

被験者には、ランダムに並べられた上記のテスト文(ルビ付き)を個別に手渡し、回答方法を説明し、各文について5段階の文法性の評価尺度(4 = 「いい / good」、3 = 「まあまあ / O.K.」、1 = 「変 / strange」、0 = 「だめ / bad」)の中から「自分の感じで」1つを選ぶように口頭および文章で説明した。各被験者とも10分前後で終了した。

3. 結果と考察

日本語の非母語話者(NNS)の被験者別の回答を表1に示す。また、母語話者(NS)の回答は、紙面の制約上平均と標準偏差のみ表2に示す。

PBCに違反するテスト文(27b)(28b)(29b)に対して4か3の文法性を与えた回答数は、NSにおいては30回答中0、NNSにおいては42回答中3で

表1 外国人留学生 (NNS) の回答

テスト文	(27a)	(27b)	(28a)	(28b)	(29a)	(29b)	(30a)	(30b)	(31a)	(31b)
被験者(a)	4	0	0	4	4	0	4	3	3	0
(b)	4	1	0	0	3	0	4	3	4	1
(c)	4	0	0	0	4	0	4	3	1	0
(d)	1	1	1	4	4	0	4	4	4	3
(e)	0	0	0	0	4	0	4	4	4	4
(f)	4	0	1	1	4	1	3	1	3	0
(g)	4	1	0	0	4	0	4	4	4	4
(h)	4	1	1	1	4	1	4	2	4	1
(i)	4	1	4	0	4	0	4	1	3	1
(j)	4	0	1	0	0	0	4	4	3	0
(k)	3	0	0	0	1	0	4	3	0	0
(l)	4	1	0	0	4	1	4	4	3	1
(m)	4	1.5	1	0	1	4	3.5	4	4	3
(n)	4	1	0	0	1	1	4	3	0	0
$\bar{X}$	3.4	0.6	0.6	0.7	3	0.6	3.9	3.1	2.9	1.3
SD	1.3	0.6	1.1	1.4	1.5	1.1	0.3	1.1	1.5	1.5

表2 統制群 (NS) の回答

テスト文	(27a)	(27b)	(28a)	(28b)	(29a)	(29b)	(30a)	(30b)	(31a)	(31b)
$\bar{X}$	3.4	0.3	3.4	0.3	1.6	0.4	3.9	2.9	2.2	0.6
SD	0.5	0.7	1.3	0.7	1.5	0.7	0.3	1.2	1.5	1.1

あり、NSは100%、NNSは93%の確率でPBC違反を見つけることができ、仮説(19)は支持された。データを詳しく見ると、この3例のPBC違反を容認したNNSは、いずれもその派生前の文法的な構造を非文と判断しているので、これらの判断は構造を正しく理解せずになされたものであると見なすことができる。つまり、明らかなPBC違反は42回答中1例もなかったのである。また、(27b) (28b) (29b)に対するNSとNNSの回答を分散分析で比較しても、いずれの場合も統計的な有意差はなかった [(27b): $F(1,22)=1.5$, n.s., (28b): $F(1,22)=0.7$, n.s., (29b): $F(1,22)=0.2$, n.s.]。つまり、L1にかきまぜ移動がない学習者でも日本語におけるPBC違反

を、NSと同様に正しく判断することができ、L2学習者もL1獲得者と同様にUGを利用することが可能だと考えられる。

上において、成人のL2学習者もPBC違反を日本語母語話者と同じく認知できることを見たが、上記のPBC違反の判断が前述のPBC以外の仮説(i)語順・(ii)入力頻度・(iii)複雑さによって下されたのではないことを以下に示したい。

第1に、語順による判断をしていると見られるNNS、すなわち(30a)を適格文、(30b)を非文と判断したNNSは、14名中3名(21%)であった。また、語順による判断はしていないと見られるNNS、すなわち(30a)と(30b)をともに適格文と見なしたNNSは、14名中11名(79%)いた。これに対して、PBCにより判断していると見られるNNS、すなわち(27)~(29)のa文を適格文、それに対応するb文を非文としたNNSは、14名中14名(100%)であり、PBCにより判断していないと見られるNNS、すなわち(27)~(29)のa文を適格文、それに対応するb文も適格文としたNNSは、14名中0名(0%)である。(PBCに関して前述の%は、(29)のペアを排除しても変わらない。)つまり、語順によりNNSのPBC違反の文に対する回答を説明することはできない。

第2に、入力頻度により判断していると見られるNNS、すなわち(29a)を適格文、(29b)を非文と見なしたNNSは、14名中0名(0%)で、1名もいなかった。逆に、入力頻度により判断していないと見られるNNS、すなわち(29a)(29b)をともに適格文と見なしたNNSは、14名中10名(71%)いた。つまり、入力頻度によりNNSのPBC違反の文に対する回答を説明することもできない。

第3に、構造の複雑さから判断していると見られるNNS、すなわち(31a)を適格文、(31b)を非文と見なしたNNSは、14名中7名(50%)いた。逆に、複雑さから判断していないと見られるNNS、すなわち(31ab)をともに適格文と判断したNNSは、14名中4名(29%)いた。複雑さも、語順・入力頻度と同様に、NNSのPBC違反の文に対する回答を説明するものではない。

上記のNNSの割合をまとめると、表3のようになる。PBCにより判断していると思われるNNSは14名で、PBCにより判断していないと思われるNNSは1名もいない；語順により判断していると思われるNNSは3名で、語順により判断していないと思われるNNSは11名である；入力によ

り判断していると思われる NNS はおらず、入力により判断していないと思われる NNS は10名である；複雑さにより判断していると思われる NNS は7名で、複雑さにより判断していないと思われる NNS は4名である。

表3

	PBC	語 順	入 力	複雑さ
示唆する	14 (100%)	3 (21%)	0 (0%)	7 (50%)
示唆しない	0 (0%)	11 (79%)	10 (71%)	4 (29%)

語順、入力、あるいは複雑さのどれか1つを根拠に、判断を下していたと思われる NNS は、14名中7名（50%）であり、この3つの仮説だけでは PBC 違反を正しく判断する NNS が100%いたことを説明することはできない。逆に、語順・入力頻度・複雑さすべてに関して、そのような仮説を根拠にせずに判断をしたと見られる NNS は、14名中3名（21%）いた。これらの、NNS の回答は、積極的に中間言語の中に PBC 原理が働いていたことを示すものである。

上記のように、語順・入力頻度・複雑さによる仮説のみに基づき、今回の調査のように高い確率で PBC 違反を正しく判断することができるとは考えられず、やはり L2 話者の文法性判断にも UG が関与していたと言えるのである。

4. 結論

小論では L1 と L2 に同じ UG 原理が機能していても、その具現化された言語操作の特性が異なる場合、L1 から L2 に正の転移が行われない場合があることを、日本語のかきまぜ移動と UG 原理 PBC について論じた。この前提にたち、かきまぜ移動を L1 にもたない14名の中上級の日本語学習者（大学生）に、かきまぜ移動により PBC 違反が派生された文を示したところ、偶然以上の確率（93%）でその非文性を見つけることが観察され、成人 L2 獲得に対する生得的な UG の関与が支持された。また、語順・入力頻度・複雑さを根拠に、PBC 違反を非文と判断しているかどうかを確認したところ、そのような判断が行われたことを積極的に示す結果は出ず、それ以外の判断が基準となったことを積極的に示す被験者が14名中3名いることがわかった。

参考文献：

- Bley-Vroman, R. (1990) The logical problem of foreign language learning. *Linguistic Analysis*, 20, 1-2, 3-49.
- Bley-Vroman, R., S. Felix, & G. Ioup. (1988) The accessibility of Universal Grammar in adult language learning. *Second Language Research*, 4, 1-32.
- Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.
- Chomsky, N. (1986) *The Knowledge of Language*. New York: Praeger.
- Chomsky, N. (1995) *The Minimalist Program*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Eubank, L., ed. (1991) *Point Counterpoint*. Amsterdam: John Benjamins.
- Eubank, L. (1995) Generative research on Second Language Acquisition. *Annual Review of Applied Linguistics*, 15, 93-107.
- Flynn, S. & W. O'Neil, eds. (1988) *Linguistic Theory in Second Language Acquisition*. Dordrecht: Kluwer.
- Haig, J. (1976) Shadow pronoun deletion in Japanese. *Linguistic Inquiry*, 7 : 2, 363-371.
- Huang, C.-T.J. (1993) Reconstruction and the structure of VP. *Linguistic Inquiry*, 24, 1, 103-138.
- Kitahara, H. (1994) Restricting ambiguous rule application. In M. Koizumi & H. Ura (eds.), *Formal Approaches to Japanese Linguistics 1*, 179-209.
- Kuno, S. (1978) Japanese: a characteristic OV language. In W. P. Lehman (ed.), *Syntactic typology*. Austin: University of Texas Press.
- Lasnik, H. & M. Saito. (1992) *Move α* . Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Lenneberg, R. H. (1967) *Biological Foundations of Language*. New York: Wiley.
- Long, M. (1990) Maturation constraints on language development. *Studies in Second Language Acquisition*, 12, 251-285.
- Miyagawa, S. (1997) Against optional scrambling. *Linguistic Inquiry*, vol. 28, no. 1, 1-25.
- Nemoto, N. (1995) Scrambling in Japanese, AGRoP, and Economy of derivation. *Lingua*, 97, 257-273.
- Sato, Y. (1995) Raising to Object in Korean. In I.-K. Lee (ed.), *Linguistics in the Morning Calm 3*, 559-573. Seoul: Hanshin Publishing Company.

- Saito, M. (1985) *Some asymmetries in Japanese and their theoretical implications*. Doctoral dissertation, MIT.
- Saito, M. (1989) Scrambling as semantically vacuous A'-movement. In M. Baltin & A. Kroch (eds.), *Alternative Conceptions of Phrase Structure*, 182-200. Chicago: University of Chicago Press.
- Saito, M. (1992) Long distance scrambling in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 1(1), 69-118.
- Schachter, J. (1989) Testing a proposed universal. In S. Gass & J. Schachter (eds.), *Linguistic Perspectives on Second Language Acquisition*, 73-88. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schachter, J. (1990) On the issues of completeness in second language acquisition. *Second Language Research*, 6, 93-124.
- Takano, Y. (1994) Unbound traces and indeterminacy of derivation. In M. Nakamura (ed.), *Current Topics in English and Japanese*, 229-253. Tokyo: Hituzi Shobo.
- White, L. (1989) *Universal Grammar and second language acquisition*. Amsterdam: John Benjamins.
- White, L. (1995) Chasing after linguistic theory. In L. Eubank, L. Selinker, & M. Sharwood Smith (eds.), *The Current State of Interlanguage*. Amsterdam: John Benjamins.

The working of Universal Grammar in interlanguage : a report of the 1996 study

SATO, Yutaka

This paper explores a possibility in which the working of Universal Grammar in second language acquisition (SLA) can be detected, even when the same universal principle is instantiated in both an L1 and L2, without confounding data with positive transfer from the L1. I first demonstrate that no transfer effects can be expected when the principle in question is instantiated in quite distinct language operations in the L1 and L2, e.g. WH-movement in English and scrambling in Japanese. Secondly, I report the results of a study which was conducted with eleven English, two French, and one Italian postpuberty learners of Japanese to investigate whether they could judge accurately Proper Binding Condition violations derived by scrambling in Japanese. The results indicate that they could do so 93% of the time, which strongly supports that UG is accessible to adult SLA. Their response patterns, when compared to those of the controls, did not indicate that they resorted to the strategies based on word order, frequency in input, or complexity in their grammaticality judgments.